長野市民病院から
知っておきたい
医療の知識
153

切実な思いに寄り添って

不妊症

小渕　彩子

「培養士」をご存じですか。不妊治療を支える専門技術者のことで、「エンブリオロジスト」とも呼ばれます。患者さんの卵子、精子を預かり、受精するお手伝いをしています。

増える体外受精

不妊症について世界保健機関（WHO）は、1年間の不妊期間を持つ場合と定義しています。不妊症の人は年々増加しており、晩婚化が影響しているといわれています。最近は夫婦の6組に1組が不妊で悩んでいると推測され、不妊治療を受ける患者さんの年齢も高くなってきています。

不妊の原因がどちらにあるかを調査した結果では、①女性41％②男性24％③女性と男性の両方24％④原因不明11％―となっています。不妊の原因に男性が関係している割合を合わせると、半分くらいの割合となります。このため、不妊症の検査は夫婦2人で受けることが重要です。

体外受精は、①卵子と精子の通り道である卵管に問題がある場合②精子が極めて少なく、元気がない場合③タイミング療法や人工授精でなかなか妊娠しない場合―に行います。2016年には国内で5万4千人以上の赤ちゃんが体外受精で産まれました。これは新生児の18人に1人です。

このように体外受精は一般化してきていますが、必ず妊娠できるということではありません。統計によれば、体外受精を行った中で39歳の母親から元気な赤ちゃんが産まれてくる確率は約10％です。40歳を超えるとさらに下がります。

私たちは、仕事などの事情があったとしても、女性が35歳までに計画的に出産するようにすることで、不妊症で悩む人を減らせると考えています。

少しでも早く治療を

女性には、妊娠できる期間に限りがあります。不妊症の治療は、早く始めないとますます妊娠しにくくなってしまいます。女性側で月経不順や無月経の期間が長い場合、子宮内膜症などの気になる症状や不安な要素がある場合には、妊娠しない期間が1年に及ぶかどうかにかかわらず、早めに産婦人科に相談してください。

不妊治療には、頻繁な通院が必要です。仕事との両立も大変です。夫婦で気持ちにずれが生じることもあります。体外受精は自費診療で、公的助成はあるものの自己負担も少なくありません。患者さんはこうした苦労を抱えながら、「赤ちゃんが欲しい」という切実な思いで治療を受けています。私たちはその気持ちに応えられるよう、サポートしています。

婦人科＝臨床検査技師、胚培養士